

父の日

平成29年6月第3週放送

六月第三日曜日は「父の日」です。近年はだいぶ定着してきましたが、母の日同様、アメリカの習慣を受け入れたものだと言われています。それは父に感謝する日、父と子の関係は様々ではないでしょうか。

仏教においては、お釈迦さまとその父スッドーナ王^{おう}、そしてお釈迦さまの息子であるラーフラの三人の間に、父と子の逸話^{いつわ}が残されています。

シャカ族の王であったスッドーナは、王国の跡取りであった自分の息子であるお釈迦さまが出家^{しゅっけ}をされたことを大変悲しんだといひます。しかし、その息子がさとりを得て人々を導いて釈尊^{しゃくそん}と呼ばれるようになり、大勢の弟子たちと共に故郷^{こきょう}に戻って来た時は、跡取り息子を手放したというつらい思いを内に隠し、息子であるお釈迦さまを歓迎したのです。

ところがその時に事件が起こります。お釈迦さまが出家する際に王宮に残してきた妻のヤショーダラがお釈迦さまの一人息子であるラーフラに、シャカ族の王国を継ぐための財宝を、父であるお釈迦さまからもらってくるように言ひます。当時十歳位の少年ラーフラは、包み込むようなお釈迦さまの人柄^{ひとがら}に心地よさを覚えてしまひます。そしてお釈迦さまは、自分が菩提樹^{ぼだいじゆ}の下で手に入れた人生の最高の財宝を譲ってあげようと語り、ラーフラを出家させてしまうのです。お釈迦さまが出家してから苦悩をわかってもらいたいと息子のラーフラを送り出した妻ヤショーダラの思いは、届くどころか一人息子までも手放すこととなってしまうのです。

しかし、本当につらい思いをしたのは王位をお釈迦さまに譲^{ゆず}ろうと考えていた父スッドーナ王であったのかもしれない。ラーフラ出家後、息子を手放しさらにその後跡取りとなるはずだった孫のラーフラまでも手放すこととなったそのつらさを、スッドーナ王はお釈迦さまに告白します。その結果、出家をする際は両親の許可を必要とするという決まりが制定されたのです。

父と息子の関係は難しいものです。父として、出家前の息子のつらい思いを受け入れ、王国の繁栄よりも息子の意思を受け入れたスッドーナ王。「父のそばにいると気持ちが安らぎます」と言ひて後を付いてきた息子ラーフラを一人の弟子^{でし}として受け入れたお釈迦さま。一方息子としては、一つの道を切り開き、人々から師^しと仰

『禅のこころ -曹洞宗-』

がれる存在となり、父親に自立したその^{ゆうし}雄姿を見せたお釈迦さま。仏教教団の決まりを誰よりも^{げんかく}厳格に守り、十大弟子の一人として父親を支え続けたラーフラ。

父の日は父親に感謝する日とありますが、どんな感謝の仕方があるでしょうか。血がつながっているから、身近にいるから自分の思いはわかっているはずだ、きっと自分を受け入れてくれるはずだと思い込んではいませんか。それぞれ、父親の立場から、また子どもの立場から、互いの思いを今、点検してみてもいいでしょうか。

後になってから気が付いたということにならないために……。

— 終 —